

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 隅田 朗彦

研究課題		英語ライティング学習指導法および動機づけを考慮した四技能習得のための学習法
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>英語学習における第二言語習得理論にかなったライティング・タスクおよび修正フィードバック法を探る。また、第二言語習得のための他技能の学習法について、学習者の動機付けを促す方法や教材を考察する。</p> <p>英作文指導法に関するこれまでの自身の研究では主に修正フィードバックの方法論を考えてきたが、第二言語習得を考えるうえで英作文・タスクおよびそれに付随した指導法を模索することも重要である。二つの要素を併せた研究を始めているところであるが、さらに発展した研究を行う。また、文理学部の英語教育を考える上で、学生の動機づけを考慮した英語学習方法を考察する必要もある。そのために従来行っている学習法の効果を検証し、新しい学習法のアクションリサーチ等も行いながらデータの分析を進める。</p>
	研究の結果	<p>ライティング学習指導法については、学習者の作文に対するエラーフィードバックを、指導したい文法事項に焦点化した場合、焦点化しないフィードバックと比較し、文の複雑さの発達に有意な正の影響を及ぼす半面、発達に応じ正確性にトレード・オフ現象が起こることが分かった。さらに、トレード・オフ現象については、作文指導を繰り返すことによって発達した複雑な文についてのみ起こることが分かり、単純な文についてはエラーが減少することが分かった。つまり、焦点化したフィードバックを利用したほうが、作文能力を向上させることに有意な影響力があったことが判明した。</p> <p>作文指導においては流暢さを向上させることも必要であるが、タスクに対する肯定的な動機づけを保ちながら、流暢さを向上させる指導法について試行をした。主に利用した指導方法は、ディクト・グロスやディクト-コンポであるが、その効果の検証については、今後のデータ分析に拠る。</p>
	研究の考察・反省	<p>研究結果の前半については、研究発表を通じた公表ができたが、論文になっていない点は挽回しなければならない。自己のある程度テーマを絞り込んだ研究については地道なデータ収集とデータ分析が必要であるが、そのペースを少々上げる必要があるだろう。さらに、自己の研究テーマには直接関連の無い英語教育におけるあらゆる問題点についても、視野を広げて考える必要がある。来年度5月に刊行予定の書籍がその先駆けとなるはずではある。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表: ①全国英語教育学会 第44回 京都研究大会 「特定のエラーに焦点をあてた修正フィードバックの効果— 文構造と動詞形の習得に焦点をあてた英作文指導」 2018年8月25日 / 龍谷大学	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	②日本大学英文学会 英語教育シンポジウム 「アクティブラーニングとは：注目の背景と大学での実践」 2018年10月13日 / 日本大学文理学部	
	③The 54th RELC International Conference The effects of focused written corrective feedback on EFL learners' accuracy development 2019年3月12日 / RELC, シンガポール	
	研究成果物: 『英語教師力アップシリーズ 第3巻, 授業力アップのための英語教育学の極意』(仮題), 「第16章 ライティングの指導と評価」(pp.266-278) (開拓社) H31年度5月刊行予定	